

## 〔巻頭言〕

## 国際学会参加のススメ

国際交流委員長 米増 直美

20 数年前、まだ若手教員だった頃、海外研修の機会をいただき、合計 10 か月間海外で暮らすことになった。当時、インターネットはあったが、メールの送受信とホームページ閲覧が中心で、SNS も動画配信もなかった。携帯電話はあったが、通話料がとても高く日本と通話することはなかった。そう思うと、この 20 年の間のテクノロジーの革新はすごいものだ。アメリカ在住の同年代の友人と話をするときは、いつもこの話で盛り上がる。海外留学のハードルは下がったと思うのだが、日本人の海外留学者は減少しているのはなぜだろうと。情報収集もしやすくなり、海外の人とコミュニケーションもしやすくなったので、わざわざ海外まで行って学ぶ必要はないのかもしれないが、やはり行かなければ体験できない感覚というものがある。海外で過ごす、日本とは異なるルールの中での生活を体験することになる。文化・価値観の違いを感じるにより、自分自身あるいは日本のこと、そして世界のことを知り、考察する機会になる。さらに 10 年後 20 年後、テクノロジーが進化し、家に居ながら世界中の文化・社会を体感できる世の中になるのかもしれないが。

COVID-19 が感染症法上の第 5 類の扱いとなった今年度、久しぶりに海外での国際学会に対面で参加することができた。広い会場での基調講演の中で、看護学の発展のために看護研究や看護実践の実績をエビデンスとして残し、積み重ねていくことの重要性が語られた。コロナ禍の数年間、ほとんどの学会は完全 Web 開催、もしくは対面参加者数を制限したハイブリッド開催で、移動することなく、国際学会でも日本国内に居ながら参加することができるのは大変便利になった。Web 開催だとしても、おそらく対面開催と同等数の研究報告がなされていると思うが、参加者数を体感することがなかった。「まさに今、ここに集まった看護職、研究者の数だけ看護が発展しているのです」というメッセージを世界各国から集まった参加者と一緒に聴いたとき、実に多くの研究者が真摯に、より良い看護を目指しているのだという一体感と同時に、世界中の看護職が積み重ねてきた研究や実践の量を実感した。そしてポスター発表を見ながら報告者に話しかけてみたり、口頭発表での討議時間中には時

間切れでできなかった小さな質問を試みたりすることで、コミュニケーション・情報交換が生まれ、新たな人間関係が構築され、まさしく対面だからこそ味わえるライブ感を満喫した学会参加となった。

本岐阜県立看護大学紀要第 24 巻の中にも看護実践、研究の積み重ねが報告されている。紀要は、大学等研究機関に所属する教員等研究者の研究論文や、教育実践報告が書かれたものであり、研究機関の実績を世に報告する重要な物だ。特に岐阜県立看護大学紀要は、より良い論文にするための査読者の厳しくも暖かい助言の元、投稿者自身の努力、編集委員会のサポートにより、実にクオリティーの高い紀要だと思っている。開学以来大事にして取り組んでいる共同研究や、修士論文も投稿されるようになり、看護実践研究の論文が多くなっているが、さらに教員が工夫しながら取り組んでいる教育実践報告も増えていくとよいのではないだろうか。看護学を修めるためには、専門関連科目も教養科目も欠かせない科目であるので、これらも含めて本学での取り組みを紹介するとよいと思う。筆者の論文の中で、他の論文に引用されているのは、最初に述べた海外研修の報告である。いわゆる研究論文ではなく、海外研修体験をまとめたものであるが、これが他の人々の参考になればうれしいし、私自身も他学で実践されている教育方法等をよく参考にさせていただいている。そして願わくは、可能な限り冊子での発刊を続けて欲しいと思っている。文献検索もとても便利になり、目当ての文献にピンポイントでたどり着くことができるので、当該文献が掲載されている学術誌全体を見ることはない。紀要の発刊は PDF 版だけにしていない大学もあるが、ページをめくりながら、岐阜県立看護大学ではどんな看護実践、教育実践、研究がされてきているのか、冊子の厚みから、積み重ねてきた看護の発展を実感したい。